『智光明荘厳経』覚え書

高崎直道

一

『智光明荘厳経』は、大正大蔵経で、第一二巻宝積部のうちに含められている、比較的小部の経典である。ただし、『大宝積経』四九会中には含められていない独立の経典である。

大乗経典の部類分けが、その経典とどれ程密着した関係にあるものか、よくわからない点があるが、ことに、宝積部や大集部というのは、部名自体、諸種の教理内容を含む雑経の集成という感を与えるものであり、内容もそのとおりであるから、本経の場合も、それにこだわることはなさそうである。それよりも、大乗の論書における利用のされ方のほうが、教理内容に見合った、その経典の所属ないし系統を示してくれることが多い。

本経は、如来蔵思想についての、インド成立の確実視される唯一の論書というべき『宝性論』における扱われ方から、その重要性がにわかにクローズ・アップされた経典である。つまり、如来蔵思想形成の一翼を担った経典の一つと考えられるが、ただ、如来蔵とか仏性といった同思想に基本的な術語は用いられていないので、まだそのような術語が成立する以前の経か、あるいは傍系的な経か、その何れかということになるであろう。

この経の重要性について、最初に着目されたのは、故宇井伯寿博士であろう。おそらく『宝性論』研究の結果であろうが、既に『印度哲学史』の中で、第二期大乗経典中の「勝鬘系統」の項下で、この経について触れておられ[1]、さらに晩年の『宝性論研究』で、同論中での引用文を主として、この経の紹介をしておられる[2]。しかし、一般的に言えば、まだ殆んど関心が払われていない状態で、わづかに、立正大学の中村瑞隆教授が、同じく宝性論研究の副産として、「入一切仏境界経について」なる論文を発表されているに過ぎない[3]。も一つ、本経に関するものとしては、古く、渡辺海旭師による、

スタイン博士発見の于闐出土梵文断片を本経の一部として比定した一論文[4]があるが、本経の内容についての言及はない。前記中村教授の論文は経録関係をはじめとし、漢蔵訳の書誌学的に詳細な紹介研究であって、ここで附加することはあまりないので、その面に関しては省略し、本経と他経との関係に重点をおいて、内容概観を試みたいと思う。

二

『智光明荘厳経』(Jñānâlokâlaṅkāra-sūtra) というのは略称で、この経の具名は、『宝性論』所引の題名によれば、Sarvabuddhaviṣayâvatāra-Jñānâlokâlaṅkāra-Sūtra である。チベット訳の同経が冒頭に掲げる梵名も、その固有名の部分はこれに一致する。

サンスクリットの原典は散佚し、現在われわれは前記中央アジア出土の断片一葉のほか、『宝性論』所引の諸文から、その一部を窺い知るにすぎない。

これに対し、漢訳は次の三訳が現存している。

(1) 如来荘厳智慧光明一切仏境界経、二巻、元魏、曇摩流支訳 (501 A. D.) (大正蔵 No. 357)

(2) 度一切諸仏境界智厳経、一巻、梁、僧伽婆羅訳 (506-510 A. D.) (大正蔵 No. 358)

(3) 仏説大乗入諸仏境界智光明荘厳経、五巻、宋、法護等訳 (C. 1054 A. D.) (四、五巻は惟浄等訳) (大正蔵 No. 359)

また、チベット訳は

Ḥphags-pa Saṅs-rgyas thams-cad kyi yul la ḥjug-paḥi ye-śes snaṅ-baḥi rgyan ces bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo (北京版 No. 768)

といい、Surendrabodhi と Ye-śes-de 等による翻訳で、九世紀頃の原典の様子を示すものと考えられるが、大たい漢訳の(3)と一致する内容をもっている。常識的推定として、一番短い(2)が原型に近く、(1)、(3)＝チベット訳の順で増広があったものと認められる。諸訳相互の出入の概略については、後で内容の比較対照表を掲げるのによって知って頂きたいが、法相の相違その他細部にわたっての比較は、前記中村氏の論文に委しい。

略称については、中村氏の如く、「入一切仏境界経」とすることも不可能ではなく、古い経録には「如来入一切仏境界経」という別名を記してある。[5] しかし、たとえば、安慧 Sthiramati の『大乗荘厳経論釈』などでも、この経を

Ḥphags-pa ye-śes snaṅ-baḥi rgyan-gyi mdo

の名で引用する[6]し、次に述べるように、経の内容から言っても、『智光明荘厳』の方が略称にはふさわしいと思われる。

さて、名は体を表わすという。ことにこの経は正しく内容

によって題名をえたものであるから、先づ題名の解説からはじめよう。

『宝性論』はその第四章仏業において、専らこの経によって作頌しているが、その釈偈で次のような題目解釈を行っている。(7)

sūtrasya tasya nāmnīva dīpitaṃ tatprayojanam/
yatraite navadṛṣṭāntā vistareṇa prakāśitāḥ// 78//
etac-chrutamayôdārajñānâlokāt svalaṃkṛtāḥ/
dhīmanto'vataranty āśu sakalaṃ buddhagocaram //79//

その中で、これら九種の譬喩が詳しく説明されているところの、かの経の題名自体によって、その目的が明らかにされている。〔すなわち〕この〔経の〕聴聞によって生ずる広大な智の光明によって飾られたほさつ達は、すみやかにあらゆる仏の行境に度入する〔と〕。

「智の光明」とは、いうまでもなく如来の智が無明の闇を破るところ、つまり「さとり」（自覚）を太陽の光明に譬えたものであるが、同時に、智のはたらきが世間に向って生ずるところ、すなわち、覚他のはたらきを、万物を育くむ太陽に譬えているわけで、この智はいわゆる後得の世間智で大悲としての仏業をあらわすものである。この智光明は、そのめぐみによって衆生たちをして諸仏の境界に入らしめるものであり、したがって、この経は世間にはたらく大悲の力としての仏業をたたえ、強調する経典である。

智のもつ二重構造――自覚と覚他――は別の言葉でいえば、菩提＝大悲ということで、その能統一としての仏如来は二重構造の智を体とするものである。すなわち、菩提、自覚の智を体とする法身と、慈悲、後得智を体とする色身の二種仏身の問題が、この経の主題である。この主題を帝釈天の影像その他の九喩（漢訳(2)は六喩のみ）をもって説き、菩提の十六相を以て、如来の智＝悲の構造を明らかにするというのが一経の構成であるが、これについても『宝性論』が簡明な概説を与えてくれる。すなわち、同論第一章如来蔵章の本頌の第一(Skt. v. I.4)、仏宝への帰依を説く偈の散文釈において、その本頌が、この『智光明荘厳経』に基いて作頌されたことを示しながら、次のように説いている。(8)

以上、これらの上述の如き六種の如来の徳性（＝無為・無功用・不依他・智・悲・力）は、詳細分明な説示の形で、正にこれと同じ順序をもって、『入一切諸仏境界智光明荘厳経』に準拠して知らるべきである。

①その経中で、

「文殊師利よ、不生不滅なりと説かれるもの、それはこの如来応供等正覚者のことである。」(yad uktam anutpādo 'nirodha iti Mañjuśrīs tathāgato 'rhan samyaksambuddha eṣaḥ)

とある、この言によって、先ず第一に、如来は「無為」(asaṃskṛta)を特質とするものであることが明らかにされている。

②また、その直後で、清浄無垢な毘琉璃宝で出来た大地に、帝釈

主　　題	大正 No. 357 (1)	大正 No. 358 (2)	大正 No. 359 (3)	Tib. 北京版 No. 768 (4) Vol 28. p. 122f.	備　　考
Ⅰ. §. 1. 〔序分〕	239 a	250 a	253 c	301 b 8	cf. RGV.（仏宝品）（経の大綱）
1. 如是我聞—会衆	239 a 1-19	250 a 21-	253 c 27-	301 b 8-	
2. 大光明の示現と大宝蓮華座の出現	239 b 1-	250 b 8 -	254 a 15-	302 b 1-	
Ⅱ. 〔正宗分〕					
不生不滅の法門—九喩					
§. 2. 会衆の請問	240 a 2-	250 c 9 -	254 b 29-	303 b 8-	
1. 蓮華座の声（偈頌）	（5偈）	（6偈）	（5偈）	（5偈）	
2. 文殊の請問	240 a 15	250 c 23	254 c 10	304 a 5	
3. 重頌	240 a 24	251 a 1	254 c 20	304 b 3（3偈）	
§. 3. 九喩の(1)—帝釈影像	240 a 28	251 a 6	254 c 28	304 b 5	cf. RGV.chap IV
§. 4. (2)—天鼓声	241 a 4	——	255 b 23 〔巻二〕	306 b 4	性起経（Ⅲ口業第3喩）
§. 5. (3)—雲雨	241 b 21	——	256 a 18	308 b 2	性起経（Ⅲ口業第7, 8喩）
§. 6. (4)—梵天	242 a 2	——	256 b 21	309 b 6	性起経（Ⅱ身業第7喩）
§. 7. 重頌（不生不滅）	242 b 16（2偈）	251 a 24（3偈）	257 a 3（2偈）	311 a 6（2偈）	安慧，経荘厳釈所引
§. 8. (5)—日光	242 b 20	251 a 29	257 a 8- b 25	311 b 1	性起経（Ⅱ身業第3, 4喩） RGV. 所引（p. 36）
§. 9. (6)—如意珠	243 a 12	251 b 20	257 b 26	〔Bam-po II〕 313 a 8	性起経（Ⅲ身業第10喩）
§. 10. (7)—響	243 b 5	251 c 5	257 c 20-258 a 19	213 a 6	性起経（Ⅲ口業第2喩）
§. 11. (8)—地	243 c 4	251 c 9	258 a 19	315 a 7	
§. 12. (9)—虚空	243 c 20	251 c 13	258 b 2	315 b 7-317 a 2	性起経（Ⅱ身業第1, 2喩）

主　　題	大正 No. 357 (1)	大正 No. 358 (2)	大正 No. 359 (3)	Tib. 北京版 No. (Vol. 49)	備　　考
Ⅲ. 菩提即大悲	〔巻下〕		〔巻三〕		
§. 13. 一切法の覚	244 a 29	251 c 21	258 c 7	317 a 3	
§. 14. 覚因（雑染と清浄）	245 a 18	——	259 c 1	319 a 4	（中央アジア出土梵文断片）
§. 15. 菩提十六相	245 b 12	252 a 6	259 c 26	320 a 8 -326 b 1	陀羅尼自在王経 宝積経菩薩蔵会
			〔巻四〕	〔Bam-po III〕	
			261 a 13	323 b 1	
§. 16. 覚行（菩薩行）	247 b 11	253 a 17- b 1	262 a 6	326 b 1	
Ⅳ. 〔流通分〕功徳讃歎					
§. 17. 文殊による如来讃歎（偈頌）	247 c 12 (10偈)	——	262 b 6 (45偈)	327 b 1 (44偈)	cf. 讃仏法身礼（不空訳）第11偈，不二金剛集所引
§. 18. 世尊による持経功徳称讃	248 a 7	253 b 1	263 b 20	329 b 2	
1. 持経功徳	（8譬）	（2譬）	（8譬）	（8譬）	
2. 重頌	249 c 20 (9偈)	253 a 24 (9. 5偈)	265 a 12 (9偈)	333 b 4 (9偈)	
§. 19. 結一流通分	250 a 10-13	253 c 14-17	265 b 20-21	334 b 5 - 7	

天の影像〔が現ずる〕という譬喩（vimala-vaiḍūryapṛthivī-śakrapratibimbôdāharaṇa）をはじめとして，乃至九種の実例によって，如来の不生不滅の義に関して，〔次の如く〕説かれる，「文殊師利よ，正にかくの如く，如来応供等正覚者は，動かず，心を動かさず，戯論せず，分別せず，妄分別しない。かれは無分別，無妄分別，無心，無作意，清涼にして不生不滅，不可見，不可聞，不可嗅，不可味，不可触，無相であり，知らしめることも出来ず，知らしめれたものでもない。（evam eva, Mañjuśrīs tathāgato'rhan samyaksambuddho nêñjate na viṭhapeti na prapañcayati na kalpayati na vikalpayati. akalpo. 'vikalpo 'citto 'manasikāraḥ śītībhūto 'nutpādo 'nirodho 'dṛṣṭo 'śruto 'nāghrāto 'nāsvādito 'spṛṣṭo 'nimitto 'vijñaptito 'vijñāpānīyaḥ）」

という如きをはじめとする，種々なる寂静相の説示がある。これによって，如来は，自らの作業において，一切の戯論や分別が寂滅しているから「無功用」（anābhoga）であると説明されてい

る。

③そのあとで九種の実例を説いた後、

④残りの経文によって、一切法の真如を現証するという面に関して、如来のさとりが、「他に依らざるもの」(aparapratyaya)であることが説明されている。

⑤そして最後に、十六種の如来の菩提(ṣoḍaśâkāra-tathāgata-bodhi)を説示して、次の如く言う。

「ここで、文殊師利よ、如来は、かくの如き相をもつ一切法を覚証し、また、衆生たちの本性(dharmadhātu=法界)を、不浄、不離垢、有汚点なりと観察して、「遊戯」という名の大悲が、衆生たちの上に現ずるのである。(tatra, Mañjuśrīs tahāgatasyaivaṃrūpān sarvadharmān abhisaṃbuddhya, sattvānāṃ ca dharmadhātuṃ vyavalokyâśuddham avimalaṃ sāṅganaṃ, vikṛiḍitā nāma sattveṣu mahākaruṇā pravartate)」と。これによって、如来が無上なる「智」(jñāna)と悲(karuṇā)とを備えていることが説明されている。

以上の説明は、この経の正宗分に相当するところを全てカバーするものであり、これに経の舞台装置を示す序分と、持経功徳を説く流通分を合せれば、経の内容紹介は完結する。いま、これを経に即して章節に分けてみると次の如くなる。(表は異訳対照をも兼ねるものとして、漢訳三本の大正大蔵経におけるページ数と、チベット訳の北京版におけるページ数を併せ掲げておく)(別表)。

三

以下、章節を追って、教理上の主要な問題点をひろってみよう。

〔I §1 序分〕

序分をどこまでと見るかは問題があるかも知れないが、ここでは経の舞台装置に関する部分を一括して序分とした。

1 如是我聞、聴聞衆と菩薩(狭義の序分)
2 大光明の示現
3 大宝蓮華座の出現
4 天竜八部衆等の来集
5 三千大千世界の荘厳の完成

先づ問題となることは、経の説処である。

(1) 王舎城鷲頭山中第四重上法界蔵殿
(2) 王舎城耆闍崛山頂法界宮殿
(3) 王舎城鷲峯山半月妙峯法界殿

T. 王舎城中、霊鷲山の四峯の樹下(rtse-mo bshiḥi śiṅ druṅ)法界胎宮殿(chos kyi dbyiṅs kyi sñiṅ-poḥi khaṅ bzaṅ)

右の比較から法界胎宮殿すなわち、dharma-dhātu-garbha-vimāna という原名が推定されるが、この名は、『華厳経・性起品』のチベット訳が、その説処として挙げる 'Chos kyi dbyiṅs kyi sñiṅ-po-can' を連想させるものがあり、更に菩

提流支訳の『深密解脱経』の説処「法界殿」とも関連があると思われる。[9] その意義については後述する。

第二は、会座にあるぼさつ達の描写であるが、その中で、

(1)善能諮問大方広宝積法門、位階十地究竟法雲…
(2)善問無比宝頂修多羅等、住法雲地…
(3)悉於宝積方広正法、而善請問、住法雲地…

T.方広蔵（śin tu rgyas paḥi sde）たる宝積経（dkon mchog brtsegs paḥi mdo）の正問を能くし、〔ぼさつの〕第十地法雲を得……

とある部分は、この経を宝積部の所属とさせる唯一の根拠と思われるが、同時に、第十法雲地に住するぼさつという表現は、この経が『華厳経』の世界を経過して出来たものであることを予想させる。これは説処の「法界胎宮」とも関連するであろうし、さらに3.にとかれる師子座（＝菩提座、如来の座所）の名、

(1)大宝蓮華蔵高座　(2)大宝蓮華師子蔵座
(3)大宝蓮華蔵師子之座
T.大宝の蓮華の胎をもつ師子座（seṅgeḥi khri nor bu rin-po che chen-poḥi padmaḥi sñiṅ-po can）

からも予想される。蓮華蔵は padma-garbha であろう。そして、正宗分の九喩の項で考察されるであろうことと相俟ってこの経は内容的に宝積部よりも華厳部に所属せしめた方がよいと思われる。（もっとも、宝積部自体が、その性格があまり明確でないので、この経のようなものが、その中に含まれることを一向にさまたげるものではない。）

列衆の名は各訳を通じてほんの数名のぼさつが挙げられているだけで、しかも経中、対告衆はもっぱら文殊師利ひとりである。

〔Ⅱ　不生不滅の法門―九喩〕（§2―§12）

§2 1.　会衆の集ったところで、かの大宝蓮華蔵師子座のあたりから声があり、如来がそこに坐って、世間のために法を説かれんことを、偈文をもって請願する。この請願は序分の伏線によれば、実は如来が大光明を発して皆をよびよせた時に仕向けたこととされている。つまり、すべてこれ仏業なのである。

2.　そこで世尊は大宝蓮華蔵の師子坐に陞り、それに対し、大衆を代表して文殊師利が、「不生不滅」(anutpādānirodha)の法門についてその意義を問い、その名の由来と特質、それに関する譬喩と因縁の説明を求める。重頌はチベット訳で三偈、(1)のみ二偈であるが、内容上増減はない。

§3 1.　世尊はそこで文殊の質問ぶりをほめ、

「多くの衆生の利益のため（bahujanahitāya）多くの衆生の安楽のため（bahujanasukhāya）世間に対する悲愍のため（lokânukaṃpāya）天界及び人界の衆生大衆のため（devamanuṣyā-

ṇāṃ sattvānām arthāya)利益と安楽のため(hitāya sukhāya)[2]、そして、ぼさつたちによって［ぼだいが］獲得されんがために、汝が如来にかくの如き義を質問せんと決意したことはよいことである。文殊師利よ、如来がその意義を説くにあたって、そのことわり(gnas=sthāna)におどろき、おそれることはない。文殊よ、汝は智慧に依るべきである」

という書き出しで、先づはじめに、『宝性論』の引用するように、

「不生不滅というのは、これ即ち、如来応供等正覚者の同義語である」

と宣言して、以下、九喩による説明に入る。

四

九喩はいうまでもなく、不生不滅なる如来が、而も「無功用」「不休息」に世間にはたらくさまを、世間における実例をたとえとして説明するものである。その一々については、[11]既に『宝性論』が文学的な韻文で再表現してくれているのでここで詳説する要はあるまい。ただ、九喩の一々の教理的意味づけを『宝性論』に随って示すと、次のごとくなる。[12]

(1) śakrapratibhāsa（帝釈影像）……darśanā（［仏身の］示現）
(2) devadundbhi（天鼓）……deśanā（［仏口による］説法）
(3) megha（雲［雨］）……vyāpi（［仏心の］遍至性）
(4) mahābrahman (m.)(梵天)……vikṛti（［化身の］変現）
(5) sūrya（日）……jñāna-nihṣṛti（智の放出（［仏智の遍照性］））
(6) cintāmaṇi（如意珠）……manoguhya（意密）
(7) pratiśrutkaśabda（響）……vāg-guhya（口密）　三密
(8) ākāśa（虚空）……kāya-guhya（身密）
(9) pṛthivī（地）……prāpti（獲得せられた［仏地］）

『宝性論』は『智光明荘厳経』にもとづくといい乍ら、九喩の順序を一部変更し、第八の「地」を第九番目の「虚空」と入替えている。その理由は、身口意の三密をそろえ（虚空を身密の譬喩とみなし）、「地」を仏地になぞらえたからであろう。しかし、同論の他の部分では四大と虚空の譬喩で、空を根元的とみているから、譬喩相互の意義づけは可成随意のようであり、あまり論理的なものではない。[13]さて、経自体は諸訳とも九喩の順序に変更はない。ただ、四訳対照表でみられるごとく、漢訳(2)は第二～第四の三例を欠いている。これに関しては、漢訳等における譬喩の増補ということで解決すると思われるが、その際根拠となることは、不生不滅を説く一種の摂偈（§7）が、漢訳(2)で第一喩の直後に挿入されているに対し、それが漢訳等では第四喩のあとに入っていること、譬喩の数は必しも九に限定される要はないことなどである。

摂偈について一言すると、これは中村氏の指摘されたごとく[14]、諸訳の間で可成、逕庭がある。いま、チベット訳からの和訳を載せると、

如来は常に不生である。
一切諸法もまた善逝に似ている。
劣慧をもつものたちは相に執着し、
世間において、非存在の法を行ずる。

如来は無漏の善なる
法の影像であり、ここには
真如なく、如来もなし。〔しかも〕
普く世間に色像を現ずる。

このうち、第一偈の前二句が、安慧の『大乗荘厳経論釈』（チベット訳）のうちで、同論第九章菩提品第四頌の典拠として引用されていて、右と同文である。[15] 漢訳(1)、(3)もほぼ会通しうるが、(2)だけは四言四句の三偈で、直接第一喩に密着している傾向がつよい。

如来常住　不生不滅　非心非色　非有非無
如琉璃地　見宮殿影　此影非有　亦復非無
衆生心浄　見如来身　非有非無　亦復如是

おそらく、第一訳の原本の出来るまでに、三喩の増加に伴って、語句をかえたものか。ただ、この重頌のもつ比重は、第二訳において他の諸訳よりはるかに大きいように思われる。すなわち、漢訳(2)によると、大宝蓮華蔵の座から自然に出た声の頌するものが「伽陀」（gāthā）とよばれる以外、経中の頌はすべて「祇夜」（geya）とよばれ、その用い方は極めて正確である。そして、経の主題たる「不生不滅なる如来」の出現（示現）について、帝釈天の影像の譬喩を用いて、総括的に説いたあとに、この重頌があり、そのあとは日光をはじめとする五喩で、仏業の積極面を身口意にわたって細別喩説するという風に前後に分つならば、漢訳は短かくても必要部分はきちんとおさえていることになる。ただ、そのあと、経の本論に当る部分に重頌がないのは、形態上斉合性を欠くけれども、他訳にもそれはないので、漢訳(2)が省略訳ではなくて、むしろ原型に近い証拠となるであろう。

帝釈天の譬喩が、本経にとって重要な如来の法身とその影像としての色身の関係をあらわす[16]として、もう一つ仏業の本質的性格を示す大事な譬喩がある。それが第五喩の日光で、『宝性論』が「智の放出」とよぶもの。いうまでもなく、本経の題名の由来するところで、如来の智慧の光明をさす。(tathāgatasūryamaṇḍala-jñānaraśmayaḥ, pl. 如来という日輪の智の光線)

仏の智を太陽の光にたとえ、あるいは仏を太陽に譬えるというのは、ごく普遍的な用法であるが[17]、ここでは譬喩の重点は、日が昇ると先づ高山を照らし、順次に低地に及んで全て

を明るくする如く、如来の智慧光明は邪定聚の衆生にまで及んで余すところがないという点にある。これは『華厳経性起品』の如来性起の十相中の第二、身業に関する第四喩とそっくり同じである。[18]その類似のために『宝性論』の漢訳者は、本経からの引用を「華厳性起中に言う」と解しているほどである。[19]

ところで、題名の説明でも言及したとおり、智光明が遍く照らし出して隠すものなく、その恩恵が邪定聚にまで及ぶというのは、仏の大悲の究竟するところであるが、この理念はまた、『華厳経性起品』全体の意図するもの、すなわち『如来の出現』の意義にほかならず、それは一微塵中に三千大千世界を包含するという譬喩で示された、仏智の遍在性とも相通ずることである。つまり、如来蔵思想の一つの重大な側面としての法身の遍在性＝仏智の衆生への内在性→一切生有如来蔵（所摂蔵）の形成の根拠となるものである。この点については、かって、『性起経』→『如来蔵経』→『宝性論』という成立順序と合せて、「性起」の意義を論じたことがあるので、[20]ここでは詳説をさけるが、そこでも予測的に言及しておいたように、『智光明荘厳経』もまた、『華厳経』からの展開の一つであることが、さきにみた説処、蓮華蔵宝座、経題と合せて、ここの譬喩の用い方から論証されるであろう。（『華厳経』からの影響という点では、九喩のうち帝釈天と地との二喩を除いて、他はすべて『性起品』に見出せることを挙げうる〔四訳対照表備考欄参照〕が、日光の喩を除けば必しも内容まで一致するわけではなく、借用は事実としても、あまり重大視することはないように思われる。）

なお、『宝性論』は右の、智光明が邪定聚に至るまでも照らし出し、「彼等をして未来の善根を生ぜしめる」という文を、一闡提の説が便宜的なものであり、一切衆生に如来の「性」(gotra)があることの経証に用いている。[21]この性すなわち「仏性」の有無の問題は、如来蔵思想にとっては厄介な問題の一つであるが、[22]本経は、『性起経』も用いていた「如来の性」(tathāgatagotra 如来種姓)の語も使用しておらず、したがって、如来蔵思想の中での範疇からいうと、「性」＝因としての如来蔵という立場を含んでいない。衆生の側の問題、すなわち能力の有無とか、状況の差別ということは全く視野の中にない。もちろん、第一喩では、「衆生の心浄ければ、如来身現ず」といい、随処で、衆生の意楽や機限に応じての示現であると説くが、意楽や機根の差にもかかわらず「無分別」「無差別」に、ということに重点があり、また、自性清浄心を前提としているから、衆生の心浄ければというのも無条件にひとしい。[23]つまり徹底した「法身」＝果の立場に立つもの、華厳の用語を使えば、「果海の大用」を示す教えである。漢訳はこの点をとらえて、この経の所説を端的に「無相法身」と

いい、それ故にこの経を「微妙法身経」とすらよんでいる。[24] この称呼が文献的にうらづけのない訳者の造語としても、経の本質をよく示していることは否定出来ない。現に『宝性論』は冒頭で引用したように、この経の全体から、「仏宝」（＝仏法身）に関する本偈の綱格を得ている。「法身経」という性格は、次章（Ⅲ）でさらに明確に示される。

五

〔Ⅲ　菩提即大悲〕

正宗分の第二部は、一切法の覚者としての如来の本質論である。この部分は、漢訳(2)から(1)に至る間にかなりの増広があり、特に§13一切法の覚から§14覚因にかけて甚しい。その部分漢訳(2)はわづか一〇行で、§14に関しては全くない。同訳によって概略を示すと、九喩の最後で、「如来が（虚空の如く）一切処に平等、無分別である」という意味の文のあとをうけて、一切法も平等・無住・無動・無依・無処・不生不滅なりと見る者は、心不顚倒・如実・無所行（無来無去）であり、従って如々・随法性・不動であり、ないし得法性の故に無怖望（＝無所得）である。もし一切法に著すれば、煩悩を起こし、畢竟じて菩提を得ることは出来ない、と説き、しからば、「世尊は云何にして菩提を得たるや」との文殊の問に対し、「無根無処にして」という答があり以下、§15菩提十六相につながる。

右文中、中グロの記号で連記したところは、いわゆる連鎖式[25]で「平等故無住、無住故無動」等の如く叙述される部分である。漢訳(1)その他は、この連鎖式を大巾に継続拡大したようなもので、右の「得法性・無稀望」につづく部分で、菩提、真如、智等に言及して、空、不二、平等などの義とむすび、あるいは「自性清浄心、客塵煩悩染」等の教理に言及し、さらに「著一切法」に関連して、ぼさつの知るべき染浄の因を法数の順に配列して、「無根無住にして菩提を得」という箇処につなげている。前半に関しては必しも組織立つた叙述でもなく、次の菩提十六相の内容との重複もみられるので、ここでは詳細な分析は省いておく。後半が§14覚因として分節した部分で、しかもその大部分にわたって、梵文断片が存在している。渡辺海旭師による発表[26]には誤植もあるし、瞥見の機会も少いので、ここに訂正を加えて再録しておこう。説明は省略する。（冒頭〔　〕内はチベット訳からの和訳）

〔自性清浄（prakṛti-pariśuddha）なる一切法は因縁の積集より生ずる。そこにおいて、ぼさつは雑染法の因と清浄法の因とを了知すべきであり、雑染因の清浄（viśuddhi）と、清浄因の清浄の故に、不住である。我を集起せしめ、見を集起せしめることは雑染の因である。法の無我に入ることの認知（忍）が清浄の因である。我慢と我見とは雑染の因。内寂静と外不行とは〕

vyavadānahetuḥ/ kāma-vyāpāda-vihiṃsā-vitarkāḥ saṃ〔kleśahetuḥ/(aśubha)maitrī-karuṇā-muditôpekṣā-pra〕tītyadharmâvatārakṣāntir vyavadānahetuḥ/ catvāro viparyāsāḥ saṃkleśahetuḥ/ catvāri smṛtyupasthā〔nāni vyavadānahetuḥ/ pañca nivāraṇāni saṃ〕kleśahetuḥ/ pañcendriyāṇi vyavadānahetuḥ/ ṣaḍāyatanāni saṃkleśahetuḥ/ ṣaḍanusmṛtaya vya〔vadānahetuḥ/ sapta asamyagdharmāḥ[28] saṃkleśahetuḥ/ sapta bodhyaṅgāni vyavadānahetuḥ/ aṣṭan mithyātvāni saṃkleśahetuḥ/ aṣṭan samyaktvāni vyavadānahetu〔ḥ/navasaṃyojanāni saṃkleśahetuḥ/ navâ〕 nupūrvasamāpattaya vyavadānahetuḥ/daśâkuśalāḥ karmapathāḥ saṃkleśahetuḥ/ daśa kuśalāḥ karma〔pathā vyavadānahetuḥ/ api ca punaḥ sarvâ〕kuśala〔manasikāraḥ saṃ〕kleśahetuḥ/ 〔sarvakuśalamanasikāro〕 vyavadānahetuḥ/ tatra va (?) 〔saṃ〕kle〔śahetur vā vyavadānahetur vā sarvadharmasvabhāvaḥ śūnyatā asattvikā ajīvikā apoṣakā apudgalakā a〕svāmikā aparigrahaḥ/ nirvyāpāra māyopamā as〔vabhāva upaśamaḥ〕/ ya upaśamaḥ sa praśamaḥ/ yaḥ praśamaḥ sā prakṛtiḥ/ yā prakṛtiḥ so'nupalambhaḥ/ yo'nupalambhaḥ so'nilayaḥ/ yo〔'nilayaḥ sa ākā〕śasamaḥ/ ākāśasamān sarvadharmān prajānāti saṃkleśavyavadānena ca vyavaharati na câkāśadharmatāṃ vijahāti/ tat ka〔smād dhetoḥ/ na hi kasya cid dharma〕syôtpādo vā nirodho vā bhavet/

以下の部分は次節（§15）の冒頭に当る。

Mañjuśrīr āha/ tad kathaṃ ca bhagavaṃs[29] tathāgatena bodhiḥ prāptā/ 〔bhagavān āha/ Mañjuśry amūlâpratiṣṭhānena〕 bodhiḥ prāptā/ Mañjuśrīr āha/ tatra kata…….

六

〔§15 菩提の十六相〕

菩提の十六相（ṣoḍaśâkāra-tathāgatabodhi）に関しては、既に于闐出土の梵文が本経の断片であることを発見した渡辺海旭師と、中村教授によって、それが『大宝積経・菩薩蔵会』中に見出されるものと一致していることが報告され[30]、また、宇井博士によって『大集経・陀羅尼自在王経』中に同じ十六種が列挙されていることが指摘されている[31]。これらを総合、吟味してみると、本経を含めて三経の何れか一つが基本で、他はそれの継承であろうことが推定される。（もちろん、三経の背後に同一の淵源を別に求めてもよいが、現存の材料による限り、そういうものは知られていないと思われる。）しかし、三経相互の貸借関係となるとにわかにはきめ難い。三経の諸訳文を全部にわたって掲げる余地はないので、今は各相の名目だけを一覧表にしておこう（別表）。比較対照した資料は次の十種である。

A『智光明荘厳経』漢訳三本、チベット訳
（前掲、諸訳対照表参照、§. 15）

B『陀羅尼自在王経』

菩提十六相

	A Jñānâlokâlaṅkārasūtra T.（北）No. 728 漢 (1)大 No. 357　(2)No. 358　(3)No. 359	B Dhāraṇīśvararājasūtra T.（北）No. 337 漢 (1) 大 No. 397　(2) No. 398	C Bodhisattvapiṭaka T.（北）No. 760–12 漢 (1) 大 No. 310–12　(2) No. 315
0	T. 320a[7] rtsa ba med pa daṅ gnas med pa (1) 245 a[1] 無根無住 (2) 252 a[1] 無根無処 (3) 259 c[20] 無根本無住	136 a[6] rtsa ba med pa daṅ gnas med pa (1) 11 c[1] 無根無住 (2) 422 b[7] 無本亦無所住	39 b[5] rtsa ba med pa gnas med pa (1) 229 b[1] 無根無住 (2) 812 b[25] 無根本無所住
1	T. 320 a[8] shi ba daṅ ñe bar shi ba (1) 245 b[12] 浄，寂静 (2) 252 a[6] 寂静（内寂静，外寂静） (3) 259 c[26] 寂静近寂	136 b[1] shi ba daṅ ñe bar shi ba (1) 11 c[5] 清浄，寂静 (2) 422 b[13] 寂然，澹泊	39 b[8] shi ba daṅ ñe bar shi ba (1) 226 b[8] 其性寂静（内寂，外静） (2) 812 c[4] 寂静近寂
2	T. 320 b[6] raṅ bshin ḥod gsal ba (1) 245 b[18] 自性清浄 (2) —— (3) 260 a[8] 自性明亮	137 b[6] raṅ bshin ḥod gsal ba (1) 11 c[12] 〔心〕性本浄 (2) 422 b[22] 本浄亦復顕曜	40 a[3] raṅ bshin gyis ḥod gsal ba (1) 226 b[17] 自性清浄 (2) 812 c[12] 自性明亮
3	T. 320 b[8] blaṅ ba med pa ñid daṅ dor ba med pa ñid (1) 245 b[22] 不取不捨 (2) 252 a[11] 不動不行 (3) 260 a[12] 無入無出	137 a[1] blaṅ ba med pa daṅ dor ba med pa (1) 11 c[16] 不取不捨 (2) 422 b[29] 無精進亦無不精進	40 a[6] blaṅ ba med pa daṅ dor ba med pa (1) 226 b[25] 無入無出 (2) 812 c[20] 無出無入
4	T. 321 a[3] mtshan ma med pa ñid daṅ dmigs pa med pa ñid (1) 245 b[27] 無相無観	137 a[4] mtshan ma med pa daṅ dmigs pa med pa (1) 11 c[22] 無想無縁	40 b[2] mtshan ma med pa daṅ dmigs pa med pa (1) 226 c[4] 無相無境

	(2) 252 a [15] 無相無縁 (3) 260 a [16] 無想亦無所縁	(2) 422 c [8] 無相亦無因縁	(2) 812 c [27] 無相無所縁
5	T. 321 a [8] ḥdas pa ma yin, ma ḥoṅs pa ma yin,da ltar ḥbyuṅ ba ma yin ste, dus gsum mñam pa ḥkhor gsum yoṅs su chad pa (1) 245 c [5] 非過去非未来非現在，三世平等三世清浄 (2) 252 a [17] 非過去未来現在，三世等断三世流転 (3) 260 a [25] 非過去未来現在，三世平等故三世断故	137 b [2] ḥdas pa……ste, dus gsum mñam pa, ḥkhor gsum yoṅs su chad pa (1) 11 c [28] 非是三世，非三世者名為三等 (2) 422 c [16] 無往無来現在，等於三世断於三場	40 b [6] ḥdas pa …… ste, dus gsum mñam pa dkyil ḥkhor gsum yoṅs su ḥchad pa. (1) 226 c [12] 非去未今三世平等三相輪断 (2) 813 a [6] 非過去未来現在，三世平等三輪清浄
6	T. 321 b [3] lus med pa ñid daṅ ḥdus ma byas pa ñid (1) 254 c [11] 無身無為 (2) 252 a [22] 無形相無為 (3) 260 b [1] 非身得，無所為故	137 b [5] lus med ciṅ, ḥdus ma byas pa (1) 12 a [5] 無身無為（非眼識器） (2) 422 c [23] 無身亦無数	41 a [1] lus med pa, mṅon par ḥdus ma byas pa (1) 226 c [20] 無為無性 (2) 813 a [12] 無為（非眼識所知）
7	T. 321 b [7] dbyer med paḥi gshi (1) 245 c [17] 無差別足跡 (2) 252 a [24] 不破句 (3) 260 b [6] 無差別句	138 a [1] dbyer med pa daṅ gnas (1) 12 a [12] 無有分別，無有句義 (2) 423 a [1] 無所壊跡	41 a [5] dbyer med pa daṅ gnas (1) 226 c [28] 無差別跡 (2) 813 a [20] 無差別句
8	T. 322 a [4] lus kyis mṅon par rdsogs par byaṅ chub par mi ḥgyur ste, sems kyis kyaṅ ma yin ṇo. (1) 245 c [27] 不可以身得，不可以心得 (2) 252 b [3] 不可以身覚，不可以心覚 (3) 260 b [16] 非身（心？）可証	135 a [5] lus kyis mṅon par rdsogs par ḥtshaṅ mi rgya, sems kyis kyaṅ ma yin no. (1) 12 a [24] 不可以身得，不可以心得 (2) 423 a [9] 不徒身而成正覚亦不従心	41 b [2] lus kyis mṅon par rdsogs par saṅs ma rgyas te, sems kyis kyaṅ ma yin no. (1) 227 a [14] 不可以身証，不可以心証 (2) 813 b [8] 非身心可証

9	T. 322 a 7 chos thams cad kyis brjod par bya ba ma yin pa. (1) 245 a 4 不可以一切法説 (2) 252 b 7 非語言可説 (3) 260 b 16 無所処，非語非言詮表	（分項せず） (1) 12 b 1 （無有住処不可宣説） (2) 423 a 14 （無言）	（分項せず） (1) 222 a 22 （無有形相用通言説） (2) 813 b 8 （無言説）
10	T. 322 b 3 gzuṅ ba med pa ñid daṅ gnas med pa ñid (1) 246 a 12 不可取不可縁 (2) 252 b 10 不可取無処 (3) 260 b 22 無所取無含蔵	138 b 7 gzuṅ du med pa daṅ gshi med pa (1) 12 b 6 無取無縁 (2) 423 a 21 無取亦無所依	41 b 7 gzuṅ ba med pa gnas pa (1) 227 a 29 無取無蔵 (2) 813 b 15 無取無含蔵
11	T. 323 a 5 stoṅ ñid kyi tshig bla dags (1) 246 b 2 名為空 (2) 252 b 16 （説）空 (3) 260 c 15 名之為空	139 a 2 stoṅ pa ñid kyi tshig bla dags (1) 12 b 17 名之為空 (2) 423 b 5 空	42 a 5 stoṅ pa ñid kyi tshig bla dags (1) 227 b 10 空之異名 (2) 813 b 27 空増語
12	T. 323 b 7 nam mkhaḥ daṅ mñam pa (1) 246 b 10 如虚空平等 (2) 252 b 26 与虚空等 (3) 261 a 13 与虚空等	139 b 2 nam mkhaḥ daṅ mñam ste, (1) 12 c 6 同於虚空 (2) 423 b 22 等如空	42 b 4 nam mkhaḥ daṅ mñam ste, (1) 227 b 28 与太虚等 (2) 813 c 15 如虚空
13	T. 324 a 5 ji lta ba bshin gyi gnas (1) 246 b 19 如実足跡 (2) 252 c 3 如実句 (3) 261 a 24 如説句	139 b 7 ji lta ba bshin gyi gnas (1) 12 c 14 真実句 (2) 424 c 4 真跡	43 a 1 ji lta ba bshin gyi gnas (1) 227 c 11 如句 (2) 813 c 25 如所説句
14	T. 324 b 5 rnam paḥi ḥjug pas rnam pa med par shugs pa (1) 246 c 2 入一切法阿門無阿門	140 a 8 rnam pa la ḥjug pas, rnam pa med pa la shugs pe (1) 12 c 25 非内非外	43 a 7 rnam pa la ḥjug pa, rnam pa med pa la shugs pa (1) 227 c 27 入於行及入無行

	(2) 242 c [8] 以行入無行 (3) 261 b [8] 若有相若無相無入無往	(2) 424 c [18] 入室則入無室	(2) 814 a [10] 入相入無相
15	T, 325 a [1] zag pa med pa ñid daṅ len pa med pa ñid (1) 246 c [23] 無漏無取法 (2) 252 c [12] 無漏無取 (3) 261 b [16] 無漏無取	140 b [4] zag na med pa daṅ, ñe bar len pa med pa (1) 13 a [2] 無漏無取 (2) 423 c [28] 無穿漏亦無所受	43 b [3] zag pa med pa, len pa med pa (1) 228 a [9] 無流無取 (2) 814 a [19] 無漏無取
16	T. 325 b [6] dug pa daṅ dri ma med pa daṅ ñon-moṅs pa med pa (1) 247 a [18] 浄無垢無点 (2) 252 c [26] 清浄無垢無煩悩 (3) 261 c [11] 清浄無垢無著	141 a [8] dag pa daṅ ñon-moṅs pa med pa (1) 13 a [22] 清浄寂静光明無諍 (2) 424 a [22] 清浄無垢無染	44 a [6] dag pa daṅ dri ma med pa daṅ ñon moṅs pa med pa (1) 228 b [4] 清浄無断無執 (2) 814 b [11] 清浄無垢無著

漢訳(1)『大集経・陀羅尼自在王菩薩品』
(大正 No. 397, Vol. 13, pp. 11c-13b)
漢訳(2)『大哀経』(道慧品第八)(大正 No. 398, Vol. 13, pp. 422b-424b)
チベット訳〔Tathāgatamahākaruṇānirdeśa〕
(北京版 No. 814, Vol. 32. p. 184 f.〔136a[6]-142a[3]〕

C『菩薩蔵経』
漢訳(1)『大宝積経・菩薩蔵会第十二』
(大正 No. 310-12, Vol. 11, pp. 221b-228b)
漢訳(2)『大乗菩薩蔵正法経』(如来不思議品)
(大正 No. 316, Vol. 11, pp. 812b-814b)
チベット訳〔Bodhisattvapiṭaka〕
(北京版 No. 760-12, Vol. 23. p. 187 f〔39a[8]-44b[8]〕)

さて、三経十訳の翻訳の先後を考えてみると、Bの(2)『大哀経』が竺法護訳で最も古く、ついで同じくBの(1)『大集経』(曇無讖訳)となる。しかし、翻訳年代が必しも成立年代の順を示さないことと、『智光明荘厳経』の三訳でも知られたことである。内容の点で大まかな比較をするとBとCは近く、Aは少し異り、簡略な面もある。BとCとの類似点は、各相の末尾に、

「如来はここにおいて大悲をおこし、衆生たちをして了知せしめんがために正法を説きたまう」

という意味の句[32]が必ず附いていること、それによって、十六

相の菩提を「如来の大悲」とよんでいる[33]ところにみられる。

第二に十六相の数え方である。B、Cは、右の繰返しの句を一区切として読んで丁度十六相を数えるわけで、これは六種の全てを通じて変化がない。ただ、その場合には、A本経では第一に数えあげずにおいた、前述の、

「如来は無根無住にして菩提を得たまう」

という意味の句、および、それにつづく無根無住の説明を以て、第一相と数えることになる。それでもなお数が十六であるのは、Aでいう第八と第九が内容は同じでありながら一相に合せられているからである。

ところで「十六」という法数は何に由来し、如何なる意義があるのだろうか。経の内容との関連で「十六」が意味をもつのはB『陀羅尼自在王経』だけである。すなわち、同経は菩薩四種瓔珞荘厳、八種光明、十六菩薩大悲、三十二善業を説いたあとで、この如来十六大悲を説き、ついで如来三十二業に及ぶという風に、四の倍数を法数の基準にしている[34]。十六という数に関する限り、Bが原素材だといわざるをえないようである。そして、B、C二経に関する限り、翻訳年代ならびに経の内容からいって、CはBから素材を得たことは先ず間違いないと思われる。

ではA本経もBから素材を得たかというと、事は少し面倒である。（AとCとの間に直接の関係をみる必要はないであろう）

十六相の数え方に出入があるのがA（経本）の諸訳の間だけであるのは、本経に十六という数の必要性のないことにもよるが、十六相の区切りをしめす繰返しの句のないことも影響している。表に掲げた十六相は漢訳(3)とチベット訳による数え方であって、漢訳(1)では第八第九の分項は明瞭でないし、(2)では第二相、菩提は自性清浄なり、との一相をすら欠いている。総じて、一番簡潔なのが本経の漢訳(2)で、他の部分に関しても四訳中の原型とみることをさまたげなかったのであるから、この部分に関しても、漢訳(2)を原型とみとめざるをえまい。そうすると、もし十六相に関してB→Aという借用があったとすると、本経は一度、第二項を省略して、また復活したことになる。しかし自性清浄というような大切な課題を、わざわざ省略したとは考えられない[35]。そこで、翻訳年代はさておいて、AとBの両経をすなおに見れば、元来、Aの原型において、菩提の相を任意に列挙してあったのをBが採用し、已が法数に合せて十六相とし、Aが単に最後の項でのみ、この菩提が直ちに如来の大悲業を起すことを説いていたのを、各項ごとに菩提即大悲であることを強調し、その名も如来の十六大悲と名づけた。Aはその後、Bの影響で菩提の相を十六と数えつつも、「無根無住」を文脈からいって相に数えるわけにいかないので、第八、第九の二相を分項したと

いうことになろう。

ところで、右の推定を成立させるためには、AB相互の間に、同一グループあるいはそれに近い密接な関係を認めなければなるまい。しかも、A→Bの影響が『大哀経』以前のこととすると、この『智光明荘厳経』の原型（漢訳(2)に近い）の成立は三世紀中葉以前ということになるであろう。

以上、十六相の大枠について比較して、右の推定に達したが、細部にわたると、異同が三経の間ではなく、諸訳相互で入乱れることがある。たとえば、冒頭の「無根住根」という点に関して、本経に

「根（mūla）とは身見（satkāyadṛṣṭi）、住（pratiṣṭhāna）とは不実なる分別（abhūtaparikalpa 虚妄分別）である」

とある部分を、Bの中では『大集経』が

「根名我見、住名四顚倒」

というのに対し、古訳の『大哀経』には

「己計身本、立在不誠思想之源」

とあって、チベット訳とも本経とも一致する場合などがある。もう一つ重要な問題として、第十六相の末尾を比較してみよう。

第十六相の主題は本経漢訳(1)を例にとると「清浄・無垢・無点」で、この論文のはじめに掲げた『宝性論』の所引の文から推定すると、その原語は、śuddha, vimala, anaṅgana となる。この項のむすびの文は、前述『宝性論』所引の文そのものに当るのであるが、煩をいとわず、諸訳を並べると、次のようになる。

A(1) 文殊師利、如来如是如実覚二一切法一、観二察衆生性一、即生二清浄無垢無点奮迅大慈悲心一。

(2) 文。如是如来覚二一切法一已、観二諸衆生一、起二大慈悲一、令二衆生遊二戯清浄無垢無煩悩処一。

(3) 如来了二知彼一切法如是相一故、現二成正覚一。然後観二察諸衆生界一、建二立清浄無垢無点遊戯法門一、以二是名字一於二衆生一大悲心転一。

B(1) 如来能覚二如是法界一、是故名仏。修二集具一足清浄寂静光明無諍一。如是四句名レ之為レ仏。

(2) 如来於レ彼於二諸色像一、了二一切法而無二色像一、遂二成正覚一、観二於一切衆生之界、無浄無垢一。於二此諸数一、是則名曰下悟（寤）二寐衆生一而懐中大哀上。

C(1) 如来於二是色無色等一切諸法一、如実覚悟、観二有情性一、遊二戯清浄無垢無執一、発二起大悲一。

(2) 如来了二知彼一切法若色無色本如是一故、現二成正覚一。観二諸衆生界清浄無垢無著一故、即起二遊戯神通一、乃於二衆生一転二大悲心一。

右の諸訳は、清浄無垢無点という語句に関し、それを

a 大悲にむすびつけるもの——A(1)

d 遊戯とむすびつけるもの——A(2)(3)C(1)

c　衆生界の説明とみなすもの――B(2)C(2)
d　仏に関係づけるもの――B(1)

に分類することが出来るが、aは直接には奮迅すなわち他訳の「遊戯」(vikrīḍita)に当る語にかかると考えられないこともない。bすなわち『大集経』は第十六項の主題ともども独特である。

漢訳には訳の不明確さがのこるので、チベット訳を比べると、A本経は

「文殊よ、ここにおいて如来応供等正覚者は衆生たちの界性(khams=dhātu)を見そなわし、衆生たちに対し、清浄、無垢、無汚点によって、遊戯(rnam par rol-pa=vikrīḍitā)と名づくる大悲心を生ずる」

となる。清浄等三句のかかり工合は明確を欠くが、元来が菩提の説明句であるから、菩提の遊戯という意味で、直接には遊戯にかかるとみてもよい。とすれば、Aの諸漢訳と大たい一致する。問題は、本論文のはじめに挙げた『宝性論』所引の文がこれと一致しないことで、もし同論の引用に誤りがなければ、『智光明荘厳経』にまた別の系統の本の存在を予想せざるをえなくなる。

さてCのチベット訳は件の箇所に関してはAと同文であるが、Bのそれをみると、

「……不浄、不離垢、有汚点なる衆生の界性(ma dag pa daṅ dri ma med pa ma yin pa daṅ/ ñon-moṅs pa daṅ bcas pahi sems can kyi khams)を観じて、衆生に対し、遊戯と名づくる大悲心を転起する」

となって、系列的にはさきにみたcに属しつつ、しかも形容句は菩提の場合の反対義で、『宝性論』所引の文とほぼ合致する。これは思いがけない結果となったものであるが、『宝性論』は『陀羅尼自在王経』をもよく引用し、全体の綱格にも利用する程であるから、あるいは同論の作者の思いちがいで、『陀羅尼自在王経』の文を引いてしまったのであろうか。『宝性論』は右の不浄等の三句を衆生の種類分けと解し、それぞれを凡夫、二乗、菩薩の界性をさすとみなしている。[36] 少くとも『智光明荘厳経』にはその意はよみとれないので、これは『宝性論』が自論の説のために、意識的に差替えたものかも知れない。それにしても『陀羅尼自在王経』自体もいろいろの展開を含んでいるように見うけられる。

その他、十六相の中で第十五相中の次の部分[37]は教理上極めて重要である。

「文殊よ、ここで、無明によってくらまされ、渇愛によって乱された衆生たちは、相互に執着しつつ、〔虚妄相〕を取るけれども、如来は我ありとの取が根本であると了知したまい、我（自己）の浄化によって衆生たちの浄化を覚証する。我の浄化なるものと、衆生の浄化なるもの、それは無二であり、二とはなさない。

(tatra, Mañjuśrīs, tathāgata ātmôpādānamūlaparijñātāvi/ ātmaviśuddhyā sarvasattvaviśuddhīm anugataḥ/ yā cātma-(38) viśuddhir yā ca sattvaviśuddhir advayaiṣā 'dvaidhikārêti/)

という、無二の義とは不生不滅のことである。

文殊よ、不生不滅なるものには、心意識のはたらくことはない。文殊よ、心意識のはたらく余地のないもの、そこには何らの分別〔もなく〕その妄分別によって非如理なる作意の起るもともない。如理作意につとめるもの、その人は無明を生起せしめない。無明が生起しないことは、十二有支の生起のないことである。十二有支の非生起、それは不生である。(anutpādânirodhe mañjuśrīś cittamanovijñānāni na pravartante/ yatra cittamanovijñā-nāni na pravartante, tatra na kaścit parikalpo yena pari-kalpenâyonišomanasikuryāt/ sa yonišomanasikāraprayukto 'vidyāṃ na samutthāpayati/ yaccâvi dyâsamutthānaṃ tad dvādaśānāṃ bhavâṅgānām asamuttānaṃ sâjātiḥ/)(39)。不生なるもの、それは決定している(niyāma)(40)。決定せるもの、それは了義(nītârtha)である。了義なるもの、それは第一義(paramā-rtha)である。第一義なるもの、それはブドガラ無し(＝無我)の義である。無我の義なるもの、それは不可説義である。不可説義なるもの、それは縁起の義である。縁起の義なるもの、それは法の義である。法の義なるもの、それは如来の義である。それ故に『縁起をみる者、その人は法を見る。法を見る者、その人は如来を見る』(yaḥ pratityasamutpādaṃ paśyati, sa dharmaṃ paśyati; yo dharmaṃ paśyati, sa tathāgataṃ (*or* buddham) paśyati)(41)と教えられるのである。すなわち、如何ように求めようとも、そのとおりには何ものもみられない——そのようにみるべきである。(sa ca tathā draṣṭavyo yathā parigaveṣayan na kiṃ cin nimittam ārambaṇam vā paśyati)(42)

文殊よ、ここで「何等の法も」というのは何であるか。すなわち、心と所縁とを正しくも随観せざる時、その時その人は如実にみるのである。それ故如来は、これらの諸法をこのように、平等性によって平等なりと現等覚したまうのである。(sa yadā na (cittaṃ *or*) nimittaṃ nârambaṇaṃ vā paśyati, tadā bhūtaṃ paśyati/ evaṃ ete dharmās tathāgatenâbhisaṃbodhaḥ sama-tayā samā (43) iti)

なお、本経漢訳(2)は、「見法即是見仏」のあとは「如是見無所見」の一句で片附け、最初の部分でも、我と衆生の平等性に関して説明がない。しかし、他の諸訳は他の二経の分を含めて、多少の出入はありながら、すべて、右の相当箇所を備えている。文の出入に関する限り、漢訳(2)は独特で古めかしい。

七

〔§16 覚行(菩薩行)〕

ぼさつ行については、漢訳(2)は1不思惟不生滅、2三世不行、3六波羅蜜についての如来との無二、4五蘊の空不空を行じないことをあげ、一法といえども〔知・断〕修・証すべき法のないこと、生滅とは仮名字説で、「実相中には起もな

く滅もなし」という文で完結する。他の諸訳は最後のところで、「一法として可尽の法のないとは、無為・不生不滅で『如来世に出づるも出でざるも、法性〔は常住で〕、法住〔法位〕、法界安住である』[44]といわれる、この法界に安住する智もまた不生不滅であり、漏も不生不滅である、故に漏尽は仮名〔言説〕である」という意味の文を増補挿入している。

〔Ⅳ　流通分〕

漢訳(2)は以上の正宗分を終ると、直ちに持経功徳についての二例と重頌があって、歓喜奉行の結びになるが、(1)→(3)の順序で大巾の増広がある。漢訳(1)は正宗分につづいて、§17文殊による如来讃歎の偈、一〇偈を作成し、（その内容は菩提十六相の記述にほぼ見合う）ついで持経功徳（§18）も八例となっている。さらに(3)およびチベット訳は§17を四〇偈に増加した上、帰敬偈五を末尾に加え（チベット訳では四偈）ている。そのうち、§17の四〇偈が不空訳『大聖文殊師利菩薩讃仏法身礼の基づくところであることが、中村教授によって指摘され[45]、また、第一二偈が『不二金剛集』に引用されていることが宇井博士によって指摘されている[46]。

結

以上、経の内容の紹介を終る。精粗統一を欠き、取捨よろしきをえていないので、題して「覚え書」とした。

註

1　『印度哲学史』（昭7、9月）p. 322. これに先立って、大乗仏教に関する部分を、岩波講座『哲学』中の一分冊（哲学史・印度）で発表（昭7・2月）。

2　『宝性論研究』（昭34）pp. 295–301

3　「入一切仏境界経について」（『大崎学報』No. 100, 昭28）pp. 185–204.

4　「古于闐及び其珍貴の古物」（『新仏教』Ⅷ, 10, 明治40）（『壺月全集』上、pp. 445–456）中村、前掲論文参照。

5　宇井『宝性論研究』p. 295

6　Shiramati: Sūtrâlaṅkāravṛtti-bhāṣya, （影印北京版、No 5531. Vol. 108, p. 249–2 (122b1)）西尾京雄『仏地経論の研究』第二巻、p. 24 参照。

7　Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra, ed. by E. H. Johnston (略号 RGV), p. 111. cf. J. Takasaki: A Study on the Ratnagotravibhāga (Uttaratantra), S. O. R. XXXIII, Rome, 1966 (略号、高崎、英訳)、p. 374. 宇井『宝性論研究』p. 266, 638. 引用中、'svalaṃ kṛtaḥ' の読みは梵本脚註、宇井説による。

8　RGV. p. 9. l. 5– p. 10, l. 1. 高崎、英訳 p. 159 f. 宇井前掲書 p. 298;（和訳）p. 495–6.）『智光明荘厳経』の本文に相当するところには梵文を挿入した。

9　『華厳経性起品』（以下『性起経』と略称）の説処等につい

ては、西尾京雄「仏教経典成立史上における華厳、如来性起経について」(『大谷大学研究年報』第二輯、昭19)(以下、略称、西尾「性起経」) p. 193 f. 参照。

10 以上の諸句は如来の出現、ないし、仏の慈悲業に対して用いられる定型句である。(e. g. AN. I, 13 [Ekapuggalavagga] 1.=増一・八・一、西尾、「性起経」pp, 169-185 参照。

一人出現於世、多饒益人、安穏衆生、愍世群萌、欲使天人獲其福祐(大正二、561 a)たゞし、漢訳(2)は「能大利益一切世間」の一句で片附けている。訳語の省略か、原典がその通りであったか、遽かにはきめ難い。

11 RGV, IV. vv. 13-76

12 RGV, IV, v. 81: darśanādeśanā vyāptir vikṛtir jñānaniḥsṛtiḥ/ mano-vāk-kāyaguhyāni prāptiś ca karuṇâtmanām// (大悲を本性とする〔諸仏〕の、見と説と遍至と変現と智の放出と、意・口・身による秘密業と得とである)各譬喩の名はそれぞれの項の見出しによる。

13 『宝性論』は前掲諸偈(譬喩の要義 udāharaṇānāṃ piṇḍârthaḥ とよばれる)のつづきで、各喩が順次に前の喩の意義をくつがえすものであるといい、(RGV. IV, v. 92)、地の譬喩をもって最終、究極とみなす(vv. 93-98)が、行間かなりこじつけがある。

14 中村瑞隆、前掲論文(註3参照) p. 193 ただし、漢訳(2)に関して言及はない。なお同訳によれば、これは祇夜(geya)すなわち重頌であって孤起偈ではない。

15 註6に挙げたのと同一箇所。同註参照。

16 本経の仏身論は基本的には法身と色身の二身説と思われるが、諸訳は必ずしも一致した用語を示さず、たゞ漠然と「如来身」とよんものを訳者が内容に応じて訳しわけたものか。例えば次のような例がある。

漢訳(2)願我当得如是色身。(251 a)

〃 (1)我亦応得如来応正遍知清浄法身(240 c)

〃 (3)願我当来獲勝妙報、同彼如来応供正等正覚(255 b)

〔チベット訳、「われわれもまた如来応供等正覚者がある如く、そのようになりたい」(301 a²)

仏身論の問題は別の機会にゆづる。なお、中村、前掲論文、p. 194 参照。

17 例えば、毘慮遮那仏(大日如来)など、根元的には、註10に挙げた増支部=増一阿含の経中で、「一人出世」の意味を「大智・大光の出現」とあるのに帰してよいであろう。

18 『六十華厳』、大正 9, 616b「譬如日出先照一切諸大山王…。

19 『宝性論』大31、831b ちなみに同論の引用箇所を、チベット訳で比較してみると『性起品』(北京版、Vol. 26, [92b⁶]): deḥi ḥog tu chud du log par ṅes paḥi sems can yaṅ chad/ sems can thams cad laḥaṅ de bshin gśegs paḥi ye śes kyi ḥod zer chen po ḥchar bar ḥgyur ro/ de ltar śar nas kyaṅ sems can rnams la śin tu phan par gyur to/ maḥoṅs paḥi rgyu yaṅ yoṅs su smin par mdsad ciṅ/ dge baḥi chos kyis rnam par ḥphel bar mdsad kyaṅ/ de bshin gśegs paḥi ye śes kyi sku ñi maḥi ḥod zer……

『智光明荘厳経』(p. 127-2 [312b⁴-⁷]): deḥi ḥog tu de bshin

gśegs pa ñi maḥi dkyil-ḥkhor gyi ye śes kyi ḥod zer dag tha na sems can log pa ñid du ñes paḥi sems kyi rgyud daṅ ldan pa rnams kyi lus la ḥbab par ḥgyur shiṅ, de dag la ma ḥoṅs paḥi rgyu yaṅ dag par skyed pas phan ḥdogs pa daṅ/ dge baḥi chos rnams kyis yaṅ dag par ḥphel bar byed do/

これに対して『宝性論』は

tataḥ paścād antaśo mithyātvaniyata-santānānām api sattvānāṃ kāyeṣu tathāgatasūryamaṇḍalaraśmayo nipatanti [tān upakurvanty] anāgatahetusaṃjanayatayā saṃvardhayanti ca kuśalair dharmair (iti…) (RGV. p. 36-7)

で、完全に『智光明荘厳経』に一致する。

20　高崎「華厳教学と如来蔵思想」（『華厳思想』昭35）pp. 275-332; "Tathāgatotpattisaṃbhavanirdeśa of the Avataṃsaka and the Ratnagotravibhāga—with special reference to the term tathāgatagotrasaṃbhava（如来性起）印仏研、VIII-1 (1958), pp. 48-53.

21　RGV. p. 36, l. 16-37. l. 9. 高崎、英訳 p. 223-4. 中村前掲論文 p. 200 f 参照。

22　一闡提の問題は『涅槃経』（大乗）が最も執拗に展開しているが、これは後の発達で、本経はそれ以前の段階ということになろうか。

23　「以衆生心浄故、見如来身」（251a）というのは漢訳(2)だけで、(1)は「一切衆生依於如来清浄法身鏡像力故、得見如来清浄法身」（240c）といい、(3)は「但以如来対現影像而為諸縁……」(255b) という、チベット訳はほぼ(3)に同じ。したがって、条件が衆生から如来にうつり、後ほど無条件的な表現となる。なお、逆に自性清浄心については、漢訳(2)はあまり言及がない。

24　〔漢訳(2)〕此経広説不可思議清浄無相微妙法身故……」(253b)「微妙法身経」（同上）（§18持経功徳の重頌、第一偈）ただし、他の諸訳は「此法門」などというだけで、概当する名称はない。

25　中村元『東洋人の思惟方法』上（昭22版）p. 62 f. 参照。

26　『壺月全集』上 pp. 452-453（〔　〕内は断片の破損部分を著者が補填したもの）誤植の訂正については中村瑞隆、前掲論文 pp. 197-199 参照。

27　'aśubha' を漢訳(1)不浄、およびT訳によって挿入。これは不浄観をさす。

28　'asamyagdharmāḥ' (漢訳(1)不浄法、(3)不正法、Tib. dam pa ma yin paḥi chos)

29　'bhagavaṃs' 漢訳(1)、チベット訳等の「世尊よ」というよびかけに基いて、断片の bhagavatā を訂正。

30　『壺月全集』上、p. 454, 中村、前掲論文 p. 204.

31　宇井『宝性論研究』p. 296（本経が『陀羅尼自在王経』の影響を受けたものと推定）

32　たとえばB(1)『大集経』では、「如来於此而起大悲、演説正法。欲了知故」

C(1)『菩薩蔵会』では「如来於彼発起大悲、我今定当開示令其覚了。如是……故」

33　『大集経陀羅尼自在王菩薩品』では、ここの節は、「云何如来観諸衆生起於大悲」との質問ではじまり（p. 11b）「無上菩提

及与大悲、如是二法等無差別」(p. 11b) といい、最後に「如是十六大悲」(14b) とよんでいる。

34 順次に『大集経』(大8) p. 5cf, 9af, 10af, 10cf, 11bf. 14bf. なお、『陀羅尼自在王経』の内容概説については、『宝性論』序品 (RGV. pp. 3-6. v. I. 2 の釈)、宇井『宝性論研究』pp. 102-106; 486-490 高崎、英訳、pp. 146-153 (十六の菩提大悲の数え方は訂正の要あり) 等参照。

35 漢訳(2)は経中どこにも「自性清浄心」ないしは、それに類似、概当する句を見出せず、「自性清浄心客塵煩悩染」という思想もない。わづかに前に述べた如く第一喩で「衆生心浄、見如来身」というのが、それと関連するが、この「衆生心浄」は、むしろ、citta-vyavadānāt [sattvā] viśuddhyante (RGV. p. 67, l. 1-2)『維摩経』大正 15, 563b, SN. III, 151 など) を思わせる句である。それが、漢訳(1)になると、§13 〔一切法の覚〕の中で、

「文殊師利。心自性清浄故、彼心客塵煩悩染、而自性清浄心不染。而彼自性清浄心、即体無染不染者、彼処無対治法故」(242c) との文を加え、ここで菩提の第二相として、

「文。菩提自性清浄。以自性清浄故。自性清浄者、所言自性清浄、彼不染如虚空、平等如虚空、自性同虚空。譬如虚空本来清浄」

の一項を加えている。この「自性清浄」はチベット訳によれば、'prakṛtiprabhāsvaraṃ cittam' で、『増支部』(AN. I, 10) の系統をひくものである。『大集経』は『陀羅尼自在王品』以外にも多く「自性清浄心、客塵煩悩染」の句が散見するので、この一項の増加を同経の仕事とみることも不可能ではない。なお、同経の菩提の第二相には、本経と同様の文のあとに、「衆生は心性本浄であるのにそれを知らずに、客塵煩悩のために染せられている」という意味の句が附加されている。自性清浄心については、別に論及する予定である。

36 RGV. p. 10. l. 2 f. 高崎、英訳 p. 161 参照。

37 以下Aのチベット訳からの和訳 ($325a^4$-b^6) 傍線の部分は『宝性論』に引用されている部分。次のカッコ内がその梵文。最後の二つは今回はじめて発見した。たゞし「経起を見るものは云々」は原始仏教以来の成句なのでサンスクリット文を挿入しておいた。

38 RGV. p. 71, ll. 12-14.

39 RGV. p. 12, l. 6-10

40 Tib. skyon-med-pa=nyāma<ni-āma=離生 (正性離生という場合の) これは niyāma に対する仏教梵語形であり、語源解釈である。

41 cf. Śālistambasūtra (稲芋経)、ed. by. Aiyaswami Sastri, Adyar, 1950, p. 1. MN, I, 190-191. etc.

42 RGV. p. 13, l. 13, (「法宝品」) 文中、kiṃ cin nimittam ārambaṇam vā' は本経に従えば、'kim cid dharmam' とすべきもの。ただし、B、C二経のチベット訳は共に mtshan-ma (=nimitta) dmigs pa (=ārambaṇa, ālambana) の語をもつ。従って『宝性論』はBから引用したのかも知れない。

43 RGV. p. 13, l. 14-15. この場合も、本経に従えば、'na nimittaṃ nārambaṇaṃ vā' は 'na *cittaṃ* nārambaṇaṃ vā

と訂正すべきであるが、Bは本経に準じるのに対し、Cのみ、『宝性論』の引用と同じである。C(1)（玄奘訳）も「相」と「縁」とする。

44　漢訳(1)若如来出世及不出世、法性法体法住法位、法界如実。」(247c)

漢訳(3)「若仏出世不出世、法性常住。以法住故即是法界。」(262a-b)

これは「法爾道理」(dharmatā-naya)とよばれるもの（『解深密経』（大正 16, 692a；(E. Lamotte's Ed. p. 258,) で SN. II. p. 25（因縁相応）をはじめとして諸処にみられる。ここも恐らくは経文の引用。高崎、宝性論英訳、p. 295 参照。

45　中村、前掲論文、p. 195

46　宇井『宝性論研究』p. 296

Advayavajrasaṃgraha (G. O. S. 40, Baroda 1927), p. 60. āryasarvaviṣayâvatāra-jñānâlokâlaṅkāra-mahāyānasūtre/

amanasikārā dharmāḥ kuśalāḥ/ manasikārā dharmā akuśalāḥ/ tatraiva:—

avikalpitasaṅkalpa apratiṣṭhitamānasa

asmṛty-amanasikāra nirālamba namo 'stu te//

漢訳(3)　無所思惟無分別　浄意亦復無所住　無所作意無念生　無所縁尊今讃礼（262c）